【日本の大学】第 74 回――東洋大学：学生数 3 万余擁する私立総合大学

東洋大学は、哲学者の井上円了が 1887 年に創設した「哲学館」が起源である。その後、1906 年に私立東洋大学に改称、第 2 次大戦後の 1949 年に新制の東洋大学となり、現在は 13 の学部と、15 の大学院研究科、学生数 3 万人余を擁する私立の総合大学となっている。本部は東京・文京区の白山にあるが、多くのキャンパスを東京都内と川越、朝霞など埼玉県や群馬県に展開している。

創立 125 周年記念館（8 号館）白山キャンパス

諸学の基礎は哲学にあり

井上は設立に当たって、日本が急速に欧化主義に流されていく中で、日本人のよりどころを取り戻すには「哲学」による「ものの見方・考え方」を人々の中に育てていくことが不可欠であると考えた。現在もその精神は受け継がれており、建学の精神として「諸学の基礎は哲学にあり」「独立自活」「知徳兼全」を掲げており、教育理念としても「自分の哲学を持つ」「本質に迫って深く考える」「主体的に社会の課題に取り組む」ことを打ち出している。

正門から続く階段を上った先には、創立者・井上円了の像が学生たちを見守っている

以下、東洋大学のホームページなどから、大学の歴史や現状を概観してみよう。

井上は 1858 年、仏教・浄土真宗大谷派の寺に生まれ、13 歳で得度し漢学や洋学を広く学んだ。東京大学の予備門に入学し、3 年間学んだあと 23 歳で東京大学文学部哲学科にただ一人の 1 期生として入学を果たした。大学では、幼少から身近にあった「仏教」を西洋哲学の目で見直し、そこに「東洋の哲学」が脈々と流れていることを発見した。東大在学中から独自の宗教論、哲学論を発表し、若くして仏教界や思想界、キリスト教界などでその名を知られるようになった。

哲学館を創設したのは、東大卒業後わずか 2 年後、29 歳の時であった。現在の文京区湯島にある仏教寺院である麟祥院の施設を借りて開設した。16 歳以上の男子を対象に普通科 1 年、高等科 2 年、定員 50 名で哲学、心理学、社会学など西洋の諸学の科目を開講した。

創立から半年後には「哲学館講義録」を出版した。これをテキストとして自宅で学習できる「館外員制度」に着手した。館外員には全国各地から応募があり、翌年には 1831 名にも上ったという。現在も大学で行われている通信教育は、この制度を継承したものだ。

井上は生涯で三度、長期の海外視察に出ており、第 1 回目は哲学館を創立した翌年の 1888 年に欧米の視察に出発している。1 年を超える海外視察から帰国後、井上は「哲学館を大学に発展させる」との計画を表明している。

哲学館創立から 2 年後、建設中の新校舎が暴風雨で倒壊、その後、類焼で校舎が全焼するなど、度重なる災難を乗り越えて、現在の東洋大学白山キャンパスの地に校舎を再建、移転することができた。1904 年には、専門学校令による「私立哲学館大学」となり、2 年後の 1906 年には「私立東洋大学」と名称を変更した。「東洋」の文字には、東洋に独自の哲学を持つ大学を作ろうとした井上の強い意志が表れているという。1928 年には大学令による認可が下り、文学部を置く単科大学に昇格している。

井上円了ホール

首都圏にキャンパス展開

1949 年の新制の東洋大学でも文学部からスタートした。翌 50 年に経済学部と短期大学部が、1952 年に大学院が、次いで法学部（1956 年）、社会学部（1959 年）を開設。さらに 1961 年には埼玉県川越キャンパスに工学部を開設（2009 年から理工学部）して総合大学への地歩を築いた。その後も教育体制を拡充強化し、兵庫県と茨城県に付属高等学校を開設（1963・64 年）、経営学部を設置（1966 年）している。学生数は 1 万人を超え、キャンパスが手狭になったことなどを受けて 1977 年には埼玉県朝霞にもキャンパスを開設した。

大学は 1987 年に創立 100 周年を迎え、国際化や情報化が進む世界や日本に対応するため、創設者である井上円了の教育理念を再確認し、それを基礎として新しい建学の精神を求める活動を展開した。具体的には、国際交流センターの設置（1987 年）、都市型大学の再生を

目指す白山キャンパスの再開発（1990 年）、井上円了記念学術センターの設置（1990 年）、夜間大学院の設置（1994 年）、群馬県の板倉キャンパスに国際地域学部と生命科学部の設置（1997 年）などが続いた。

さらに２１世紀に入ると、白山キャンパスにおいて文系５学部の４年間一貫教育を実施したり、朝霞キャンパスにライフデザイン学部を設置（いずれも 2005 年）したり、白山第 2 キャンパスの開設や法科大学院の移転、大手町サテライトの開設（いずれも 2006 年）などが行われた。

中庭から見上げた高層校舎は 2 号館。白山キャンパスの象徴。

また、2009 年には、川越キャンパスに理工学部（工学部を改組）と総合情報学部を設置し、国際地域学部を白山第 2 キャンパスに移転している。新学部の開設は続き、2013 年には食環境科学部を板倉キャンパスに設置、2017 年には国際学部（グローバルイノベーション学科、国際地域学科）、国際観光学部（国際観光学科）、情報連携学部（情報連携学科）の 3 学部 4 学科と、文学部に国際文化コミュニケーション学科を開設した。

これにより現在、大学は 13 の学部と、大学院の 15 研究科を五つのキャンパスに展開している。13 学部は、文学部、経済学部、経営学部、法学部、社会学部、生命科学部、食環境科学部、ライフデザイン学部、理工学部、総合情報学部、国際学部、国際観光学部、情報連携学部である。

広大な敷地に最先端の研究施設がそろう川越キャンパス

このうち文学部は 1887 年に学校が創設してからの、最も伝統のある学部である。「読む力・書く力・考える力」の育成を目標に掲げ、基盤教育、文学部基盤科目、専門科目からなるカリキュラムのもとに、広範な教養と深い知識の涵養を図る。少人数で受講する演習（ゼミナール）などを通したきめ細かい教育を目指す。哲学科、東洋思想文化学科、日本文学文化学科、英米文学科、史学科、教育学科、国際文化コミュニケーション学科の 7 学科を開設している。東洋思想文化学科、日本文学文化学科、教育学科には夜間（イブニングコース）を、日本文学文化学科には通信教育課程を設けている。

大学で 2 番目に古い学部である経済学部は、前身の哲学館時代には既に経済学が講座として開設されていた。常に時代時代に合った「経済のいま」を学ぶことができる体制を整えている。ミクロ・マクロ経済学などの基礎的経済理論を基盤としながら、総合的な視点から現在の日本や世界で発生している経済現象を明らかにし、今後の日本社会、国際社会のあり方を追求する。経済学科、国際経済学科、総合政策学科、経済学科（イブニングコース）がある。

法学部は、1956 年開設で、第 1 部法律学科と第 2 部法律学科（現イブニングコース）でスタート。現在は、企業法務の重要性や国際化への対応を踏まえて、企業法学科が加わっている。（法律学科は通信教育課程も併設されている）

社会学部は文学部の社会学科を分離独立して 1959 年に創設された。様々な領域の学問に

触れて、知識を身につけることで社会学への理解を深め、フィールドワークの経験を積み、実証調査の能力を高めて、社会で実際に起こっている出来事に対し多角的にアプローチできる能力を養う。社会学科、社会文化システム学科、社会福祉学科、メディアコミュニケーション学科、社会心理学科、国際社会学科（2021 年度から）からなる。社会学科と社会福祉学科にはイブニングコースがある。

1966 年に開設された経営学部は、2007 年には 1、2 年生も白山キャンパスに移転し、東京都心で 4 年間の一貫教育が実施されることとなった。時代の流れや変化する社会の中で、経営手法や市場環境を研究し、企業内外に生じている様々な問題を分析し、解決を目指し、企業の意思決定に必要な知識や技術を科学的に探る。企業活動には、社会経済のほか環境問題や社会情勢など様々な要素が密接に関係してくるため、経営の専門枠だけにとらわれずに幅広い視野を持ってのぞむことが求められている。経営学科（夜間も併設）のほか、マーケティング学科、会計ファイナンス学科がある。

国際化、生命科学、情報化に対応

国際化への対応として 1997 年に群馬県の板倉キャンパスに設立されたのが国際地域学部である。国際的な視野に立って、地域づくりや観光振興に貢献し、地域を創造的に活性化させる人材を育成することを特色として掲げている。2009 年には都心の白山第 2 キャンパスに移転（20 年に白山キャンパスに移転）した。国際地域学科と国際観光学科があったが、国際地域学科は、2017 年度からスタートした国際学部の国際地域学科（グローバル・イノベーション学科と 2 学科制）へ吸収され、国際観光学科はやはり 17 年度に始まった国際観光学部の国際観光学科となった。

1997 年に創設された生命科学部は、生命現象の謎を遺伝子レベル、細胞レベル、個体レベルで明らかにし、生命の総合的な理解を図る。当初、生命科学科 1 学科だったが、バイオテクノロジーへの注目度の高まりなどを背景に、2009 年に応用生物科学科と食環境化学科が作られて 3 学科となった。このうち、食環境科学科と 2013 年にできた健康栄養学科を生命科学部から分離して、新たに 2 学科からなる食環境科学部が新設された。このため、生命科学部は、生命科学科と応用生物科学科の 2 学科である。

食環境科学部は、いのちの根源を探る生命科学をベースに、安全・安心、食品開発、栄養などの「食」の知識を総合的、科学的に学ぶ。2 学科のうち、食環境科学科にはフードサイエンス専攻と、スポーツ・食品機能専攻（2022 年度から学生募集を停止）という二つの専攻を設けた。健康栄養学科は、管理栄養士の養成を核に、医療・福祉・教育の現場、のみならず地域社会や企業での活躍を視野に入れた新時代の人材養成に力を注ぐ。

生命科学部と食環境科学部の学生が修学する板倉キャンパス。

2004 年に創設されたライフデザイン学部は、一人ひとりの個性を尊重し、人権を守り、より良い生活と環境を創造するための教育を実践している。遊びやくらし、健康とスポーツ、環境と創造を学びのキーワードとして、未来に立ち向かう生き方を思索し、多様で豊かな生活を具体化できるライフ・デザインの手法を学ぶ。生活支援学科（生活支援学専攻、子ども支援学専攻）、健康スポーツ学科、人間環境デザイン学科がある。同学部は、2021 年に朝霞から赤羽台キャンパスに移転した。

2009 年創設の総合情報学部は、情報・経営・メディア・スポーツ・心理・文化・芸術・環境・社会・経済などの多様な分野にわたる文理融合教育・研究が特色の学部である。総合情報学科 1 学科の中に、3 コース（システム情報コース、心理・スポーツ情報コース、メディア文化コース）がある。

バイオナノエレクトロニクス研究センター

2017 年に赤羽台キャンパス（東京都北区）に開設された情報連携学部は、1 年次ですべての学生がプログラミングと日・英コミュニケーションを集中的に学び、情報連携の素地を身につける。2 年次からは四つのコースに分かれて、コースごとに二つの研究分野に関する専門的な知識を身につける。実践的な演習を通じて、情報連携のためのスキルを学ぶ。

大学は、国際化や国際協力にも積極的に取り組んでいる。文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」や 2022 年度からは「大学の世界展開力強化事業」に採択され、大学の国際競争力向上や、多様な場でグローバルに活躍できる人財の育成を図っている。世界展開力強化事業では、世界 6 カ国（米国、英国、インドネシア、オーストラリア、韓国、タイ）の協定校 11 大学と協力して、日本語・日本文化をテーマとする学生交流プログラムを進めている。

情報連携学部の校舎（赤羽台キャンパス）

本部のある白山キャンパスには、国際教育センターがあり、日本からの留学生の支援や海外から大学に来て学ぶ外国人留学生に対する各種サービスを提供している。新型コロナまん延以降は、海外渡航を伴わないオンラインプログラムの準備などの対応も行っている。

現在学生数は、学部学生が第 1 部、27,122（うち女性 11、461）名、第 2 部 2、761（うち女性 810）名、通信教育課程 176（うち女性 113）名、大学院が 964（うち女性 348）名となっている。専任教員数は、全キャンパス合わせて 766 名である。(2022 年 5 月現在)

学長は矢口悦子氏である。お茶の水女子大学文教育学部卒、同大学院人文科学研究科（修士課程）修了、同大学院人間文化研究科（博士課程）単位取得退学。その後、法政大学、お茶の水女子大学、千葉大学の非常勤講師を務めたあと、東洋大学には 2003 年 4 月から文学部教授となり、2015 年文学部長、学校法人東洋大学評議員などを務め、2020 年 4 月から現職。人文科学博士、専門は社会教育学、生涯学習論である。

日文：滝川　進
写真：東洋大学 HP